



ヘルニアから肝移植・小腸移植まで 幅広い小児外科診療

2006年4月の小児外科新設に伴い、小児科との連携を深めて幅広い小児外科疾患を扱えるよう活動し、一般小児外科手術症例の増加、新生児症例の増加など、確実に小児外科診療の実績を積み上げてきた。2007年から小児外科学会の特定施設となり、3年間に十分な実績を積み重ね、2010年には同専門医認定施設に復帰した。小児重症肝胆道疾患(胆道閉鎖症、代謝疾患など)に対する肝移植を含む外科的治療は、京都大学小児外科の特徴である。2009年には脳死小腸移植も再開となった。今後とも小児肝移植・小腸移植といった小児移植症例を扱うとともに、新生児症例、腹腔鏡症例、腫瘍外科症例を随時増加させていきたいと考えている。

代表的診療対象疾患

先天性食道閉鎖症、先天性十二指腸閉鎖症、先天性小腸閉鎖症、直腸肛門奇形(鎖肛)、腸回転異常症、短腸症候群、胃食道逆流症、腸閉塞(イレウス)、ヒルシュスプリング病、(先天性)胆道閉鎖症、(先天性)胆道拡張症、アラジール症候群、家族性胆汁鬱滞症候群、代謝疾患(ウイルソン病、OTC欠損症など)尿素サイクル異常症、肝硬変、劇症肝炎、鼠径ヘルニア、臍ヘルニア、臍帯ヘルニア、腹壁破裂、(先天性)横隔膜ヘルニア、漏斗胸、肺分画症、肝芽腫、神経芽(細胞)腫、奇形腫、腎芽腫、横紋筋肉腫、卵巣嚢腫、停留精巣

診療体制と治療実績

外来診療体制

初診外来を火曜日と木曜日に開設(電話連絡には適宜対応)し、小児外科領域のすべての疾患に対応している。肝移植適応疾患患者に対しては臓器移植医療部情報室が初期対応し、比較的時間がかかる肝移植説明外来をコーディネートしている。

入院診療体制

北病棟3階に12床の入院病床を有し入院診療を行っている。従来からの小児肝移植、脳死小腸移植を施行している。移植症例の術直後は集中治療室(ICU)で管理し、安定後に北病棟3階で術後管理、検査入院などを行っている。新生児症例に関しては新生児集中治療室(NICU)の新生児担当小児科医師の管理のもと、上記対象疾患のうち新生児に発症する先天性疾患(先天性食道閉鎖症、先天性十二指腸閉鎖症、先天性小腸閉鎖症、直腸肛門奇形<鎖肛>、臍帯ヘルニア、腹壁破裂、先天性横隔膜ヘルニア、ヒルシュスプリング病、腸回転異常症など)に関する手術を担当している。

当院は小児がん拠点病院に選定され、小児科で化学療法によって治療をされた小児固形腫瘍(肝芽腫、神経芽腫、悪性奇形腫、腎芽腫、横紋筋肉腫など)の外科治療を積極的に施行している。肝芽腫においては化学療法によっても切除困難で肝に局限する際には肝移植を行っている。

診療実績

中央手術室	
移植関連(生体部分肝移植術)	19例
NICU症例(食道閉鎖症、横隔膜ヘルニア修復術など)	13例
腫瘍関連	9例
肝胆膵疾患(先天性胆道拡張症など)	3例
腹腔鏡手術(腹腔鏡下噴門形成術)	2例
気道・呼吸器系手術(肺分画症など)	5例
その他	16例
	計 67
日帰り手術	
鼠径ヘルニア根治術 など	計 34

地域医療・高度先進医療の取り組み

地域との確かな連携

地域の小児科からの紹介患者を積極的に受け入れるとともに、全国から肝移植が必要な患児を受け入れている。また、京都大学の関連病院を中心に3ヶ月に1回、京都大学小児外科研究会セミナーを行っている。情報交換を行いながら小児外科診療のレベルアップに努めている。また2011年から小児外科学会の教育関連施設として2施設を登録しその施設に対して指導を行っている。

脳死小腸移植、臨床研究を展開

高度先進医療として脳死小腸移植を腸管不全に対して行っている。臨床研究としては、腸管不全に対する小腸移植技術の確立に関する研究、進行性家族性肝内胆汁鬱滞症、良性反復性肝内胆汁鬱滞症の新規診断法の確立を指向した研究を多施設共同研究として行っている。